ライティングサポートデスク報告

チューターワークショップの概要と今後の課題
―書き手とチューターの成長を目指して―

ライティングサポートデスク担当
相場　いぶき

1. はじめに

2010 年に本学のライティング支援を担うために設置されたライティングサポートデスク（以下 WSD）は、これまで「書き手の成長を促す」という理念のもと大学院生チューターが主体となりピア・サポートを行ってきた。2022 年秋学期現在、WSD には博士後期課程 11 名、博士前期課程 10 名、学部生 4 名、合計 25 名のチューターが在籍している。しかしすべてのチューターが常に稼働している訳ではなく、研究のために長期間 WSD を離れざるを得ないチューターや、シフトを入れる時間帯によっては予約がほとんど入らないチューターが複数名いるのが現状である。採用決定後に行われる新人チューター研修以降、十分な実践を重ねる機会がないままのチューターが存在する状況は、質の確保という点からも改善すべきであり、チューターワークショップはその解決手段として期待されている。

本稿では、近年の WSD 利用状況を踏まえつつ、チューターが新人研修以降も知識や技術をブラッシュアップすることの重要性を述べる。そして筆者が担当する日本語チューターワークショップの概要を報告し、今後の課題と可能性を探る。

2. 近年の WSD 利用状況

WSD では、コロナ禍に入った 2020 年以降、利用件数の増加が続いている [(1)]。すべてのセッションが対面で行われた 2019 年度は年間延べ 546 件の利用であったのに対し、予約セッションをオンラインに切り替えた 2020 年度は年間延べ 683 件、2021 年度に至っては年間延べ 816 件と大幅な伸びを示している（図 1）。オンラインセッションは利用者とチューター双方にとって利便性が高いことに加え、コロナ禍の学習不安が利用件数の増加に大きく影響したと言える（相場，2021）。学年別の利用状況を見ると、

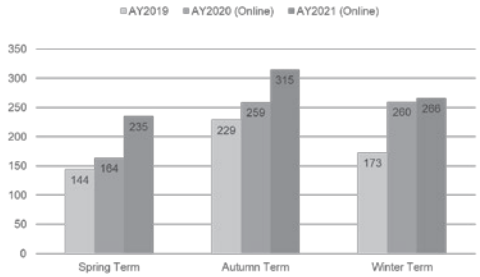

図1　2019年から2021年までの利用件数

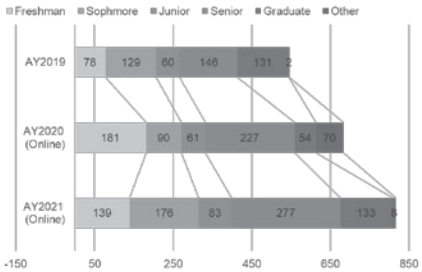

図2　学年別利用件数

2020 年度は学部 1 年生の利用件数が前年度に対して約 132% 増加し、2021 年度は学部 2 年生の利用件数が前年度に対して約 95% 増加と、低学年における利用者の伸びが顕著である（図 2）。

2019 年から 2021 年の利用状況をまとめた図 3 によると、相談文書の種類はレポートが 44% と最も多く、次いで卒業論文 24%、ELA（English for Liberal Arts）課題 13%、修士論文・博士論文 10%、その他 9% となっている。また、執筆段階別では、ラフドラフト 32%、最終稿 29%、構想段階 24%、アウトライン 15% という内訳となっており、約 1/4 は文書を持ち込まない「手ぶら」の状態での利用であることが見て取れる。

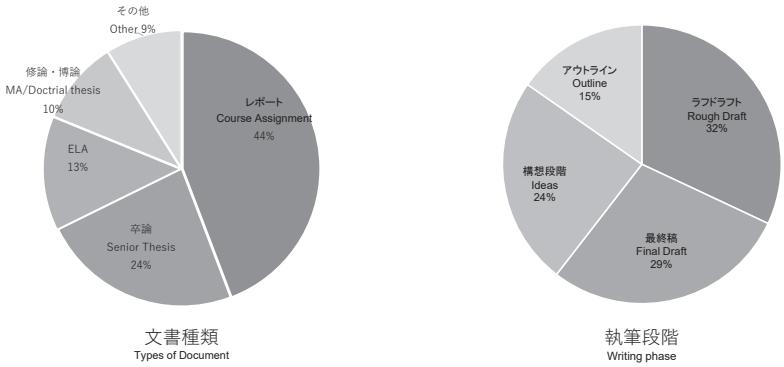

図3　相談文書の種類と執筆段階

このように、年々利用件数が増加する中、WSD には分野を問わずさまざまな文書と執筆段階に対応できるチューターの育成が求められており、新人研修後も知識や技術をブラッシュアップする機会をチューターに提供していくことは、WSD が担う重要な役目であると言えるだろう。

3. チューターワークショップの目的とテーマ

3-1　義務化の背景

WSD チューターの選考は毎年 4 月と 9 月に行われ、書類および面接審査を経て採用が決定した者は新人チューター研修への参加が必須となっている。日本語チューターに対する研修は Training 1 から Training 5 までの 5 つのステップから成り、先輩チューターを相手にしたロールプレイやデモセッションを含む実践的な内容となっている（相場 , 2022）。しかし、新人チューター研修への参加後どのように研鑽を重ねるかは個々のチューター次第であり、利用者の多様なニーズに対応できるような幅広い知識と適切なサポート技術をチューター自身の努力だけで身に付けるのは、決して容易なことではない。このような背景を踏まえ、新人チューター研修担当者である ELA 教員 2 名と筆者は、WSD を管轄する CTL（Center for Teaching and Learning）センター長および

WSD 担当者と協議を重ねた。その結果、2021 年春学期から 1 学期に 1 回のワークショップ参加が全てのチューターに義務付けられることとなった [(2)]。

3-2　ワークショップのテーマと概要

参加が必須となったワークショップにおいて、チューターは不足していた知識や技術を補うだけでなく、ほかのチューター、あるいは教師と率直な意見を交わす機会を得ている。表 1 は、2021 年春学期から 2022 年秋学期までに行われたワークショップのテーマをまとめたものである。

表1　2021年春学期から2022年秋学期までのチューターワークショップ

学期	月日	ワークショップのテーマ	参加者
2021 年春学期	4/27	Adapting to Writer's Learning Style	6 名
	5/18	Troubleshooting: Difficult Tutoring Situations	5 名
	6/ 8	Addressing Language Issues During Tutorials	3 名
2021 年秋学期	9/28	Dealing with Common Tutoring Scenarios	6 名
	10/11	セッションにおける会話の役割	2 名
	10/15	The Writing Centre as a Safe Space and Identity Politics	6 名
	11/ 2	The Emotional Labor of Tutoring	5 名
2021 年冬学期	1/14	Facilitative and Directive Tutoring Strategies	7 名
	1/25	Deepening Our Understanding of the Elements of a Research Paper	8 名
	2/15	Tutoring for Reading	5 名
	3/ 3	添削や専門的なアドバイスを求められた場合の対応	10 名
2022 年春学期	5/10	Promoting the WSD in Class Visits	1 名
	5/17	Building Confidence in Tutees	7 名
	5/31	Writing Literature Reviews and Developing Conceptual Frameworks	8 名
	6/24	セッションにおける会話（声がけ）の役割 Part 2	6 名
2022 年秋学期	10/ 4	Building Confidence	6 名
	10/11	Writing Tutor Skills for Your Resume & Career	5 名
	10/27	Writing Centers Across Borders: Tutor Voices	3 名
	11/21	WSD チューターのパターン・ランゲージ	6 名

これらのワークショップはすべてオンラインで開催されており、表内でテーマが英語で表記されたものは英語で行われ、日本語で表記されたものは日本語で行われている。どのワークショップに参加するかはチューター自身の興味や必要性に委ねられており、母語やセッションでの使用言語を問わずに選択可能である。よって日本語チューターが英語によるワークショップに参加できるのはもちろんのこと、英語チューターが日本語によるワークショップに参加するケースも見られる。

ELA 教員 2 名が担当する英語のワークショップが 1 学期に 3 ～ 4 回行われているの

に対して、筆者が担当する日本語のワークショップは1学期に1回程度の開催となっている。その理由は、これらのワークショップはもともと学部生英語チューターのブラッシュアップを目指すELA教員からの発案であったからである。また、WSDは一つの組織であり、日本語のサポートにおいても英語のサポートにおいてもWSDの理念は一致しているため、当初は言語ごとに分ける必要はないと考えられていたことも一因である。実際に2021年春学期のワークショップはすべて英語で行われ、日本語によるワークショップを担う筆者もそれに参加し、必要に応じてディスカッションを日本語で促すという形式が取られた。

3-3　日本語チューターワークショップが目指すもの

言語ごとにチューターを分けずにワークショップを開催することが望ましいとは言え、実際には英語で行われるワークショップでは十分に意見を伝えることが難しいと感じる日本語チューターもいる。また、英語チューターと日本語チューターでは困難を感じる点が異なるという見解もあり、2021年秋学期からは日本語によるワークショップも行われることとなった。出身国や母語、教育システム等の背景がさまざまである英語チューターに対するワークショップでは、よりチュートリアルの理念や考え方を深めることが求められる。一方、ほとんどがICUの学部卒業生である日本語チューターは、すでにWSDにおけるチュートリアルに対して十分な共通認識を持っている。よって日本語チューターワークショップでは、より実践的かつ具体的な知識や技術のブラッシュアップを目指すことにしている。次章では、日本語チューターワークショップの具体的な内容をテーマ別に紹介する。

4. 日本語チューターワークショップの概要

4-1 「教える」と「考えさせる」を区別する

WSDチューターには、対話を通じて書き手に気づきを与えながらライティング支援を行うことが求められるが、教えて（伝えて）よいことと考えさせる（引き出す）べきことの区別は常に難しさの一つとなっている。そこで、2021年冬学期のワークショップは「添削や専門的なアドバイスを求められた場合の対応」を考えることをテーマとして開催し、日英合わせて10名のチューターが参加し議論を深めた。ワークショップではまず、グループに分かれて添削や専門的なアドバイスを求められた事例を共有し、その後、ライティング支援において「教える」と「考えさせる」を区別するために、増地（2020）が考案したマトリックスをもとに、どのような対応が可能であるかを検討した。このワークショップはZoomによるオンライン形式で行われたため、グループでの検討にはデジタルホワイトボードのJamboardを使用して可視化を図った。

マトリックスは、チューターが答えを知っていること / 知らないこと、書き手が答えを知っていること / 知らないことの4つの組み合わせをもとに、A:思い出させる（教える）、B:教える、C:考えさせる（引き出す）、D:一緒に考える / 調べるよう助言する、に分類されている。例えば、誤字脱字の指摘や読者としての感想は、チューターは知っているが書き手が知らないことであるBに分類されるため、教える（伝える）ことが

可能である。一方、書き手の頭の中にあるアイデアや意向等は、書き手だけが知っていることであるCに分類されるため、チューターがすべきことは考えさせる（引き出す）ことである。このような分類の指針を得ることによって、チューターが「教える」ことと「考えさせる」ことを素早く区別し、40分間という限られたセッションの時間を有効に使えるようになることが、このワークショップが目指したゴールであった。

増地（2020）が指摘するように、チューターは文章を一方的に添削しないという方針のもとでライティング支援を行っているものの、実際の現場では「教えるしかないと思われること」も存在する。このワークショップは、そのような理念と実状の狭間でジレンマを抱えるチューターに対してより実践的な解決のヒントを与えたという点において、有意義であったと言えるだろう。また、日本語が母語ではない英語チューター2名もマトリックスが役に立ったと述べていることから、チューターが「教える」ことと「考えさせる」ことの区別は、言語を問わずチューターにとって必要な技術であることも示唆された。

4-2　会話の役割を考える

2021年秋学期と2022年春学期には、「セッションにおける会話（声がけ）の役割」をテーマにワークショップを行い、初回は2名、2回目は英語チューターを含む6名が参加した。対話を通じたライティング支援において、チューターと書き手の会話はセッションの要であり、これまでも有効な声がけの具体例を知りたいという要望が多く寄せられていた。しかしWSDでは実際のセッションの録画は個人情報保護の観点から認められていないため、ワークショップのためにベテランチューターが自ら書き下ろしたスクリプトを用いてデモセッションを行い、その様子をZoomで録画したものを教材とすることとした。

2回のワークショップの目的は、いずれも書き手の気づきと解決を促すための声がけとはどのようなものかを理解し、自身のライティングサポートに応用できるようにすることであった。初回のワークショップでは、参加者はまず、これまでのセッションで声がけに困った、あるいは声がけを誤ったと感じた事例を挙げ、Google Docsに書き出して共有した。その後、デモセッション動画の視聴とスクリプトの分析を行い、ポイントとなる場面における声がけの意図を考察し、事例の改善策について全体で話し合った。

同じテーマで行った2回目のワークショップの手順もほぼ初回と同様であったが、自身の声がけを分類しながら事例を分析するという視点をあらたに加えた。具体的には、山下（2021）がチューターの発話を分析する際の着目点として用いたInstruction Strategies（指導的なスキャフォールディング）、Cognitive Scaffolding Strategies（認知的なスキャフォールディング）、Motivational Scaffolding Strategies（動機づけを高めるスキャフォールディング）をもとに、ライティング支援のどのような場面でどのような声がけ（スキャフォールディング）が有効かを検討していった。例えば、どんなテーマで課題を書きたいかが決まっておらずアイデアを引き出すのが難しい書き手に対しては、「キーワードでも何か授業で印象に残っているものはありますか？」のような認知的な声がけと、「よく覚えていましたね！」といった動機づけを高める声がけを組み合

わせることが対応策として挙げられた。

これらのワークショップに参加したチューターは、文書を直接添削するのではなく対話によって書き手の気づきを促すという手法において Cognitive Scaffolding Strategies の使用がもっとも重要であり、それは個々のチューターの力量が問われるものであることに気がつくことができた。また、セッションの導入部と終了時の振り返り部分では Motivational Scaffolding Strategies が多く用いられていることも確認できていた。

4-3　チューターの実践知を言語化する

2022 年冬学期からは、これまでチューターが重ねた実践知を可視化し、引き継ぐための共同作業を取り入れたワークショップを試みることにした。実践知の蓄積方法として用いたのは、井庭（2019）が提唱するパターン・ランゲージ（以下 PL）である。PL は、成功事例に繰り返し見られる「匠の技」をパターンとして抽出し、言語とイラストで視覚化するという実践的なものであり、現在様々な分野で応用されている [(3)]。PL では、優れた実践者へのインタビューで掘り起こした実践知をパターンの種として体系化し、最終的にカード等にまとめて視覚化してゆく。大森・黒田（2022）は、日本語のアカデミックライティング支援における PL を用いた実践知の抽出過程を詳述する中で、「パターン名」「文脈」「問題」「解決」で構成された合計 26 のパターン・カード案を提示している。

PL の作成には本来 4 か月から 8 か月かかると言われているが、WSD におけるチューターワークショップの時間は 1 コマ（70 分）に限られており、作成過程をすべて丁寧になぞることは難しい。また、大森・黒田（2022）で優れた実践者とされたチューターは教員 4 名であり、主に大学院生がチューターを担う WSD の実状とは異なっている。そこで PL を取り入れた第 1 回目のワークショップは、PL の目的と手法を理解することを主なゴールとし、参加者（6 名）同士が Zoom 上でインタビューをし合い、ライティング支援のコツを Jamboard に書き出すところまでを行った。

WSD チューターは入れ替わりが多く、実践知の蓄積と引き継ぎは長年の懸案事項である。また、コロナ禍以降のオンライン化により、チューター同士がつながる機会がほとんどないことも改善すべき課題となっている。PL を用いた共同作業は、それらの課題を解決する大きな可能性を秘めており、今後もワークショップやそれ以外の形で継続してゆくつもりである。2023 年 1 月現在の予定では、WSD セッションの観察とチューターへのインタビューを行うボランティアを募集し、さらなる実践知の抽出を行うこととなっている。2 月には冬学期のチューターワークショップとしてより多くの参加者を募り、パターンの種を体系化していく予定である。その後は有志によるパターンの執筆と洗練、イラスト作成等の作業を経て、3 月のチューター会議で試作品を発表することを目指している。

「WSD チューターのパターン・ランゲージ作成」という共同作業を通じて、個々のチューターが自身の経験や技術を伝え合いながら自発的につながる機会を得ることは、パターン・カードという立派な成果物を残すことよりむしろ大切であり、この実践の隠れたゴールはそこにあると言えるだろう。4 月以降は、日本語チューターだけでなく英

語チューターにも範囲を広げ、さらには書き手の実践知をパターン化することも視野に入れる等、今後の活動案は膨らむばかりである。

5. 今後の課題

以上、本稿では近年の利用状況を踏まえつつ、WSD がワークショップを通じてさらなる成長の機会をチューターに提供することの重要性を述べるとともに、筆者が担当した日本語チューターワークショップの目的と概要を報告した。今後の課題としては、チューターが抱える悩みや困難に寄り添い、より実践的なワークショップを開催してゆくことが挙げられる。そのためにはまず、担当教員がチューターの声を拾い上げる機会を増やしていく必要があるだろう。オンライン化は利用者とチューター双方の利便性を高めた一方、孤立を促している点も否定できない。対面時は気軽に立ち寄ることができた WSD に現在姿を見せるのは、昼休みの Walk-in セッションを担当するチューターに限られており、依然としてセッション用ブースは閑散としている。チューター同士が気軽に情報を交換し合い、悩みを打ち明けながらより良いライティング支援の手法を見出していくための「きっかけ作り」は、今後さらに必要となるだろう。前章で挙げたような参加型、あるいは協同作業型のワークショップの継続が一助となることを期待している。

筆者が WSD を担当することになった 2019 年秋学期のチューター会議では、図書館内のミーティングルームに大勢のチューターが集い、ベテランチューターが進行を務める中、活発な話し合いがなされていた。あれから 3 年、コロナ禍によるオンライン化という大きな変化を経て、WSD は、書き手のみならずチューター自身にとっても拠り所となり、また成長できる場となるためのあり方を模索している。今後のあるべき姿は、教員あるいは担当職員のみが定めるものではなく、アカデミックライティングに関わる全ての人、つまりは全学をあげて追求すべきものであることを最後に記し、今年度の報告を終えたい。

注

(1) 第 2 章で示すデータはすべて WSD ウェブサイト https://office.icu.ac.jp/ctl/writing_support/wsd.html による。また、ここで言う利用件数とは予約不要な Walk-in セッションを除くものであり、実質的には予約件数を示している。

(2) ワークショップの対象者は実際に稼働可能なチューターとし、WSD を離れている場合の参加は強制していない。また、チューターの負担とモチベーションの維持を考慮し、現在はすべてのワークショップ参加が有償である。

(3) クリエイティブシフト「パターン・ランゲージとは」https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/ 参照。(2023 年 1 月 15 日最終閲覧)

参考文献

相場いぶき (2021)「2020 年春学期におけるライティング支援のオンライン化ーライティングサポートデスクの取り組みー」『ICU 日本語教育研究』17, 77-82.

相場いぶき（2022）「ライティングサポートデスクにおけるチューター育成－ 2021 年度新人チューター研修報告－」『ICU 日本語教育研究』18, 63-70.
井庭崇編著（2019）『クリエイティブ・ラーニング：創造社会の学びと教育』慶應義塾大学出版会
大森優・黒田史彦（2022）「日本語アカデミックライティング支援における実践知の抽出過程－「発想のスイッチ」を例として－」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』37, 93-102.
増地ひとみ（2020）「日本語ライティング支援に携わる学部生チューターの研修－『教える』と『考えさせる』を区別するマトリクスの提案－」『リメディアル教育研究』14, 62-72.
山下美朋（2021）「ライティング支援 SAPP におけるチューターと相談者の発話分析－主体性・自律性を促す支援活動－」『LET 関西支部研究集録』19, 15-40.

謝辞

本稿執筆にあたり、WSD 担当者の伊東邦江さんから利用状況に関する資料をご提供いただきました。チューター研修およびワークショップ開催へのご尽力に対する感謝の気持ちとともに、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。